会派行政視察報告書

◇１０月１０日（水）「遠野市」

東日本大震災の支援体制について

◇１０月１１日（木）「八幡平市」

環境に配慮した新エネルギーの活用について

◇１０月１２日（金）「気仙沼市」

環境と防災に配慮したフォレストベンチ工法活用プロジェクトについて

２０１３年１月

知多市議会「公明党議員団」

視察報告書

日　　時	平成２４年１０月１０日
視　察　先	岩手県遠野市
視 察 項 目	東日本大震災の支援体制について
視　察　者	公明党議員団（中村千惠子、大村　聡)、市民クラブ５名
視 察 内 容	内陸と沿岸の中間地点に位置する遠野市は、内陸にも沿岸にも通じる道路網が整備された結節点となっており、遠野市を中心とした半径 50 キロメートル円内に、沿岸の宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、さらには内陸部の盛岡市、奥州市までを包括しており、ヘリコプターで約 15 分、陸路で約 1 時間の距離となっている。また、遠野市の地質は花崗岩で安定しており、活断層がない災害に強い地域とされている。 沿岸で津波被害が発生した場合、支援部隊等を受け入れ、集結させ、各方面に展開すること、既存の遠野運動公園を臨時ヘリポート、野営地及び駐車場として活用が可能なことなど、災害時における後方支援の基地としての地理的な条件を満たしている。これらのことを受け、遠野市では、津波が来ない内陸だからこそこの役割を担うことを考え、三陸地域の地震・津波災害に備えて後方支援体制整備の具現化に取り組んでいた。 それらを鑑み東日本大震災の支援体制について (1) 大震災による被害の内容と現在の状況について (2) 支援要請に対する市の対応ついて (3) 後方支援の内容と現在の状況について (4) ボランティアの状況について などを視察した。
所　　感	被災地にあって被災地を支援する。尋常ではない揺れから市長としての立場、権限を超えてやっているのではないかとの自問自答の中、あえて市職員を被災地に向かわせ救援活動や物資運搬に当たらせたことは、人と人とのつながり、地域間の交流からとの本田敏秋・遠野市長の言葉に、熱き想いがひしひしと伝わってきました。「場の力」があるとはいえ、この思いなしには為し得なかったこととの思いを強くした次第である。 さらに市長はタテ割りの課題についても触れ、被災市町村からの要請を前提とした災害救助法は役に立たない。国・県の情報が被災市町村に伝わらない。そのことで情報不足となり不安感を増すという負のスパイラルを助長することとなる。法と手続を超えた対応、水平連携によるヨコのつながり、更に要請を待たずに被災地支援に駆けつけ、自ら情報収集し、首長の判断で素早い支援を行うなど、ヨコの連携を支える責任・権限・財源を踏まえた新しい仕組みづくりの重要性、必要性を訴えていた。後方支援の大切さを学ぶことができ、大変に有意義な視察となった。

視察報告書

日　　時	平成２４年１０月１１日
視　察　先	岩手県八幡平市
視 察 項 目	環境に配慮した新エネルギーの活用について
視　察　者	公明党議員団（中村千惠子、大村　聡）
視 察 内 容	八幡平市は、県北西部の奥羽山系に囲まれた東北三県の中央に位置する市である。大きく３つの水系や温泉などに恵まれ、その自然環境を活用した地熱発電や水力発電の再生可能エネルギーの供給地でもあり、再生エネルギーの調査検討を実施している。 今回視察した小水力発電所は、明治百年記念公園に設置された、農業用水路を利用した水車型の発電施設である。現在日本の主要エネルギー源の石油・石炭などの化石燃料には限りがあり、「再生可能エネルギー」である太陽光や太陽熱、水力、風力、バイオマス、地熱などのエネルギーの調査研究に力が入れられている。特に原子力発電からの移行を考え、その傾向は加速すると予測される。 小水力発電所は、発電の仕組みが目で見て確認できる発電所として設置された。水位を一定に保ち、落差２メートルを確保することで発電でき、小規模ではあるが水の力のみで活用できる発電システムである。現在最大出力は9.9 キロワット（約 14 世帯分）ではあるが、再生エネルギーを通じ、環境学習について学習する場となることも目的にしている。 八幡平市では、このほか民間企業による地熱発電所や県企業局の水力発電のほか数多くの再生可能エネルギーを利用した発電施設があり、～めざせ、自然エネルギーの自給自足へ～のまちづくりに挑戦している。
所　　感	小水力発電は落差を利用した発電システムであり、用水路でも利用できることから、本市でも条件が整えば設置できるものであると感じた。しかし、全国での利用率としては、まだ実績が少ないように感じられ、設置における費用対効果が低いと思われた。また、建設機器等がドイツ製であることからコストが高くなっている。再生可能エネルギーの調査検討が今後進み、こうした課題がクリアされた場合、大いに利用が期待できるエネルギーとなると思う。 これからの日本にとっては、エネルギー問題は避けては通れない喫緊の問題である。八幡平市の小水力発電、水力・地熱発電、ペレットストーブ、木質バイオマスボイラー、雪冷房など利用したエネルギー供給は、安定性・効率性・経済効果が求められるとともに環境への配慮も大きな課題である。現在、エネルギーの地産地消との意見も聞かれるが、本市を含め、日本が抱える今後のエネルギー問題の参考となる有意義な視察であった。

視察報告書

日　　時	平成２４年１０月１２日
視　察　先	宮城県気仙沼市
視 察 項 目	環境と防災に配慮したフォレストベンチ工法活用プロジェクトについて
視　察　者	公明党議員団（中村千恵子、大村　聡）
視 察 内 容	気仙沼市は、23 年の東日本大震災の被害により、人口・世帯数ともに減少し、産業中心であった水産業と観光も大きな痛手を受けた。24 年９月 30 日現在でも、93 カ所の仮設住宅があり、7,975 人の方が生活している。こうした被害の中にあって、ほとんど損傷することなく、湾岸沿いの斜面を崩壊から守ったフォレストベンチ工法の導入への震災復興市民委員会による取り組み及び施工されていた現地を視察した。 市民委員会は、地元出身者 11 名で構成され、1 日も早く市民の不安を払拭し、被災者目線でのグローバルな広い視点で意見を述べ合い、必要に応じて専門家の意見や市民の意見を聞くことを申し合わせ、復興に向け、提言書がまとめられ、提出された。この委員会では、復旧・復興に向け 18 のプロジェクトが設置され、その中に「環境と防災に配慮したフォレストベンチ工法活用プロジェクト」が立ち上げられた。大震災で多大な被害を受けた地域の早期復興に向け、高台移転や道路拡張工事に伴うのり面等に関し、気仙沼市沿岸部で施工実績があり、今回の大地震と巨大津波にも耐え、最小限度の被害で、住宅やのり面を無事に守ったフォレストベンチ工法を提案した。 フォレストベンチ工法の特徴としては、軽量で通水性に優れ、津波に強い、自然の森が再生される、コスト削減が期待できる、景観が保たれ、現地調達が可能な木材も利用でき、森から出た自然材料が森に戻るなどがある。 今後の課題等としては、市として発注する全ての工事を環境保全型とすることを盛り込んだ「環境保全型都市」の宣言をすること、国・県・民間の補助金、助成金等の活用など予算を確保する必要があることが挙げられる。
所　　感	気仙沼市はいまだに 8,000 人近くの方が仮設住宅で過ごしており、復興の道のりは程遠い感がある。そうした実態に、故郷の今、将来を憂い覚悟と決意を持って発足した市民委員会は、今後のまちづくりの根幹を成す市民協働の意識の強い表れであると思う。各プロジェクトとも市民感覚と被災者感覚で意見を出し集約されたとのことであるが、そうした発想から生まれた各提案に期待をするものである。今回視察したフォレストベンチ工法は、10 年前に市内で施工されており、今回の津波でもほとんど損傷することがなく湾沿いの斜面を崩壊から守った。工法の特徴から環境と防災に配慮したまちづくりができるものと大いに期待ができ、参考となった。なお、工法を取り入れた市内の現場も視察し、津波の脅威に耐え抜いた工法場所を実際に確認し、工法の可能性を実感した。今後、課題を見据え本市としての取り組みを推進していきたい。